ドラッカーを読む

ピーター・F・ドラッカーはその著書の中でアダム・スミスについて次のように述べている。

「アダム・スミスの『国富論』ほど、大きな影響をもたらした書物は少ない。教育のない者も書名だけは聞いた事があるという経済学の本である。しかし、アダム・スミスが国富論で言わんとしたことは、その出版後、数十年にして忘れ去られ、再発見されたのはごく最近にすぎない。彼は経済人を好いていたわけではなかった。利己心などさらに好いていなかった。また、政府は経済運営が下手である、などとも言っていなかった。彼は政府なるものは、その本質からして、経済を運営する事は出来ないと言った。しかも、下手に運営する事さえ出来ないと言ったのである。」（新しい現実）

私はこの言葉をまねて、次のように言おうと思う。

ドラッカーほど現代社会に大きな影響をもたらした者は少ない。経営について関与しない者も、その名前だけは聞いたことがあるという経営学者である。しかし、ドラッカーがその著書で言わんとしたことは、その死後、ただちに忘れ始められてしまった。彼は経営者を好いていたわけではなかった。営利などさらに好いていなかった。また、公的機関に企業経営を取り入れなければならない、などと言った事はなかった。組織には目的があり、目的に応じたマネジメントが必要だと言ったのである。

もちろん、マネジメントすれば、高校野球のチームが甲子園に出場できるなどと言うはずもなかった。

今日、ドラッカーの名前は、マネジメントの言葉とともに人々に記憶されている。そのマネジメントについてドラッカーは次のように言っている。

「マネジメントについてこれまであまり知られていない事実がある。それはマネジメントの理論や原則を初めて体系的に適用したのは、企業ではなく公的機関であったという事である。テディ・ルーズベルト時代の陸軍長官エリフ・ルートである。彼はマネジメントの諸原則をアメリカ陸軍の再編成に適用した。それから数年後の一九〇八年には、バージニア州のストーン市に議会任命のシティ・マネジャーが生まれた。・・・ついでながら、このシティ・マネジャーこそ、マネジャーと呼ばれる最初の上級業務執行者であった。企業では、この肩書はまだ使われていなかった。」

「今日においても、マネジメントは企業

代表取締役社長
鈴木英介



の世界と同じくらい、あるいはそれ以上に企業以外の世界で見る事が出来る。現代の組織の中で最もマネジメントの意識の高いのは、おそらく軍であろう。その次が病院である。」

「それにも関らず、今日ほとんどの人は、マネジメントという言葉を耳にしたり目にする時、これを企業のマネジメントの事と受け取ってしまう。」（マネジメント・フロンティア）

さらに「マネジメントとは何か」として次のように言っている。

「マネジメントとは何だろうか。諸々の手法と手品の詰め合わせ袋なのか。ビジネススクールで教えているように、分析道具の一束なのか。もちろん道具としてのマネジメントも重要である。医師にとって、体温計や解剖学が大切であるのと同じである。しかし、マネジメントとは、何にもまして、ものの考え方そのものであることを教えている。」

「したがってマネジメントの言葉はドラッカーの発明になるものではない。しかし、ドラッカーはこの言葉に新しい意味を付与し、再定義したのだった。

マネジメントが「ものの考え方」となった時、その中核となる資源は「知識」である。

「基本的な経済資源、すなわち経済用語で言うところの『生産手段』は、もはや、資本でも、天然資源（経済学の『土地』）でも『労働』でもない。それは知識となる。」

「今や、知識の仕事への適用たる『生産性』と『イノベーション』によって価値は創出される。そして、知識社会における最も重要な社会勢力は『知識労働者』となる。」

「彼らは、自ら『生産要素』と『生産手段』を所有する」「したがって、ポスト資本主義社会における『経済的』な課題は、知識労働と知識労働者の生産性の問題である。またポスト資本主義社会における『社会的』な課題は、ポスト資本主義社会における第二の階級たる人々、すなわちサービス労働者の尊厳にかかわる問題である。」（ポスト資本主義社会）

ドラッカーは二つの階級、すなわち「知識労働者」と「サービス労働者」を規定する。もちろんこれ以外の階級が無いわけではない。工場労働者（マルクスの言うところのプロレタリアート）、資本家、地主、貴族や僧侶などである。しかし現代では、少なくとも先進国では、これらは社会的に意味をなす階級ではない。絶